challenge III

宮崎の堅実2社が新分野に挑戦

第一建設「福祉施設」、旭建設「焼酎製造」に参入

第一建設の子会社が運営する「デイサービスセンターはまゆう」(高岡町)

03年度の宮崎建設業の破たん件数は49件（負債総額約83億円）。ピーク時（99年）に約6400社あった建設業者数は、約6000件にまで減っている。国や自治体からの公共事業の縮小が最大の要因であることは疑いようもない。「三位一体改革により官公庁からの発注は減り、経営環境が一層厳しくなることは確実」（地元建設業者）なだけに、"脱・公共事業"と新規事業の開拓が急がれる。そんな中、すでに数社で、新分野への進出を模索する動きがある。代表的なのが老人ホームや高齢者マンションの管理・運営などだ。一方、「第一建設」は、同業界としては県内初となるデイサービスセンターを開設。「旭建設」は、焼酎の製造・販売を開始した。

「将来は事業の柱の1つに据えたい」―両社の社長は、新規事業の拡大に意欲を見せる。

県業界初のデイサービスセンターは安定化にめど

第一建設（宮崎市、橋邉忠司社長）は03年6月、宮崎市と隣接する高岡町に「デイサービスセンターはまゆう」を開所した。子会社が運営し、センター長は同社から派遣。スタッフは生活指導員や看護士など11人。定員は25人で、同市と周辺5町を対象地域とする。同所の敷地は、もともと資材置き場として利用していた場所。施設だけなら3分の2程度の事業費で開設できるのも魅力だった。「所有不動産と人材を有効活用できると判断し」（橋邉社長）、県内の建設業界としては初めて福祉分野に参入した。

「最初からすんなりと新規事業として福祉関連を想定していたわけではない」と橋邉社長。「10年以上も前から企業体質を変換する必要性は感じていた」同社長が、最初に検討したのは産業廃棄物の処理事業。環境問題への関心の高まりを受け、「建設関連産業ならば本業のノウハウを生かしやすい」との発想からだった。しかし、「処分場問題やこれに伴う住民理解など、事業化には問題点が少なくなかった」ためやむなく断念した。

そんな中、00年の介護保険法の施行が同分野参入への直接的な契機となった。全国の施設を視察するなど約1年かけて検討を重ねた結果、事業化を決定。だが、「全く畑違いの分野なだけに、03年上期は試行錯誤の連続だった」。最大の悩みは、1日平均で5～6人という低い利用率。この要因を「地域密着経営と経営者マインドの不

足」とみた橋邉社長は、欠員となっていたスタッフに経験豊富な人材を登用。サービス内容を見直すとともに広報活動を徹底した。すると平均利用者数は一気に倍増し、同年の下期には「何とか採算ラインに乗った」。04年度中にはさらに、1日平均の利用者数10人増を見込んでおり、「経常利益年間1000万円を安定的に確保できる体制にしたい」とする。

一方で、本社社員の活用策も進む。全社員には、ホームヘルパーなど福祉関係の資格取得を積極的に推奨。03年12月には橋邉社長自ら、ヘルパー2級資格を取得した。福祉関係の資格を加算手当てに含めることで、社員の取得意欲を高めている。第2次計画として、05年度中のグループホームもしくはショートステイ施設の開所を予定。さらに、介護施設の建設や介護・福祉器具レンタルの事業化も見据えている。「事業安定化のめどは付きつつある。難しい部分もあるが、さらにサービスの質を高め地域に密着した経営を推し進めたい」と橋邉社長は語る。

偶然と幸運で焼酎業界参入の特Aランク企業

「建設業界にも事業の多角化が問われる時代。経営の中核を担う新しい柱が欲しかった」―県内39番目の蔵元として東郷町に誕生したのが富乃露酒造店（東郷町、黒木繁人社長）だ。町有地約3300平方㍍を買い受け、総事業費約4億円をかけて工場を建設。8月27日に仕込みを開始、初蔵出しは12月を予定する。

県内39番目の蔵元として誕生した「富乃露酒造」（東郷町）

同店の母体は県内トップクラスの実力を誇る旭建設（日向市、同）。「地域文化を発信したいという強い思いがあった」黒木社長が新分野参入のキーワードに据えたのが「ふるさとと食文化」。5年前、市内で地元出身の歌人・伊藤一彦氏の講演を聞いた際、「東郷町出身の歌人・若山牧水の文化人としての知名度をもっと高めたい、という思いに駆られた」。ほぼ同時期に、同町唯一の蔵元・牧水酒造が廃業したのも契機となり、焼酎業界への参入を思い立った。

本格的に事業化の可能性を探り始めたのは02年3月。社内に新規事業部を立ち上げた。しかし、蔵を操業するために必要な酒類製造免許は新規発行が困難なことが判明。すでに免許を持つ業者から屋号（営業権）を譲り受け営業するしか方法がなかった。そこで担当者が、賛同してくれる業者を探し出すため、宮崎、鹿児島、熊本3県の蔵元を回った。その後、当時は鹿児島県串木野町に本社を置く富乃露酒造に行き着いた。

その後も「複数の偶然と幸運が重なり、焼酎業界に参入できた」と黒木社長。と言うのも、富乃露酒造が営業権の譲渡に応諾したのは休業中であったことと、区画整理事業の移転対象区域となっていたためだった。関係者から、過去に県境を超えて営業権が譲渡された事例がないと聞き、「国税局が認めるか確信がなかった」が、03年12月初旬には移転免許通知書の仮免許にあたる内許可通知書が下りた。それから約9カ月後の今年8月25日、本免許を取得した。

新焼酎の銘柄は「日向 存処離れ」（ひむか・あくがれ）に決定。若山牧水の第1歌集「海の声」にある、「けふもまたこころの鐘をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれて行く」からとっている。同社では、年間製造量400石（7万2000㍑）を計画。将来的には同1000石（18万㍑）にまで生産体制を整備したいとする。すでに、都市部を中心に話を聞きつけた関係者からの問い合わせが殺到しているが、「まずは地元住民に愛される焼酎にしたい」と、今のところ全国展開の予定はない。「13～15年後の単年度黒字を目指す」方針だ。

「第一建設」「旭建設」ともに、主な主要取引先は官公庁。新分野参入の要因の1つは、早急な経営体質の改善が迫られたためといえる。一方で、ある地元経済人は2社が新規事業を開拓できた重要な要因はほかにあるとする。つまり、「両社は堅実路線で無借金経営を続けてきた。余力を残していたことが、ここに来て大きくものを言っている」。〝脱・公共事業〟の好例となり得るのか関心が高まっている。